

6 それは間違いだ――教材の正しい理解を――

定例の校内研究会の1時間として取り組まれたX先生の授業は、流石にベテランというだけあって完璧なものであった。月の満ち欠けという極めて取り上げにくい内容の学習が見事なまでに構築されていた。子どもたちもよく活動していた。自らが課題を持ち、それに取り組んでいた。適切に準備された教具、計画的に進められた板書、それらがいまってこの時間の学習成果は十分なものとなっていた。

その日の午後に行われた反省会では、そうした工夫について学ぶべき点が明らかにされ、子どもの活動を一層高めていくための方策が論議された。参会者の多くが多くの収穫を得た時間であった。

素晴らしい授業の余韻に浸りながら学校を出た。その夜、西の空には、上弦の月があった。三々五々駅に向かう私たちの頭の中には、明日の授業のことがあった。それは、あの授業に触発された多くの工夫であった。

「お月さんが上向いてはるわ。明日は雨やなあ」

「せやなあ」

それは、あの素晴らしい授業を展開して見せてくれたX先生とその同僚の声である。どうやら「月が上向きになっていると雨になる」という言い伝えがあるらしい。

月の満ち欠けは、太陽・月・地球の位置関係によって規則正しく起こる現象である。29.5日のサイクルの月の満ち欠けがその日その日の天気を左右しているのならば話は簡単である。气象台は不要、天文台で計算した結果をカレンダーに書き込んでおけば済むことになる。

あの素晴らしい授業はいったいなんだったのだろう。確かに、子どもたちはよく考え、月の満ち欠けを学習した。それをさせたのはX先

生である。しかし、当のその先生は月の満ち欠けについてまったくの誤解をしておられたのである。

「中学校では、1つの教科であるとはいいいながら物理・化学・生物・地学の全領域にわたる幅広い内容を、小学校では8つの教科すべてを引き受けるという生活であれば間違いがあっても…」

という言い訳は通用しない。しかし、長い教師生活の中には、私自身が誤った認識をしていたという反省がある。それは、おしべの毛の細胞を原形質流動の観察に使うムラサキツユクサと道端に見られ青花紙づくりに使われるツユクサを混同していたこと、水蒸気の「蒸」の第9画のない字を書いて生徒に指摘されたことである。

このような自分自身の不勉強以外にも、新しい発見が加わったり、知らぬ間に表記が改められたりすることがある。例えば、原子量などの概念は登場してこない小学校に勤務している間に、その基準となる物質が酸素から炭素に変わり、塩素イオンは塩化物イオンへとその名称が言い換えられていた。講読していた理科教育誌で、このことを知っていたのは幸いなことであった。また、これまでは日常的なものではなかった用語が檜舞台に登場し、誰もが知るところとなるといった場合がある。雲仙岳の噴火に伴う「火砕流」や阪神淡路大震災で有名になった「活断層」などがそれである。

「自ら学ぶ…」は、子どもたちに示す前に、まず私たちが心がけなければならないことなのである。